



Title	強制とサービス
Author(s)	大塚, 達也
Citation	年報いわみざわ : 初等教育・教師教育研究, 27: 41-41
Issue Date	2006-02
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8807">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8807</a>
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。



## 強制とサービス

大塚 達也

強制すべきところはいささかの感傷もまじえず強制するというのが教育の原則ですが、昨今の流れを見ていると、教育もいよいよサービスの時代に突入したというのが率直な印象です。私は皮肉を言っているわけではありません。もちろんこれは教育の二面性をさす事柄なので、それ自体は悪いことではありません。今や国家の手で行う公教育も規制緩和が始まったと言うべきか（誰ですか、全く逆だなんて言っているのは）。

しかし学生に対しては譲れない一線があります。私は数年前から専門外の授業で、図書館司書の資格を与える「読書と豊かな人間性」という授業を担当しています。「豊かな人間性」などと銘打たれると、人間が人間を教育することの矛盾を痛感しますが、引き受けた以上そんなことは言っていられません。試行錯誤で初年度の授業を終えた時、十数人の学生が立ち替わり入れ替わりしてこんなことを言いました。「試験を受けられなかったので、レポートにかえていただけませんか」と。私は思わず声を荒げて言った。「試験は十問出題している。どれひとつもレポートにかえられるものではない。君はレポートで何を書くつもりなのか。この授業は資格を与えるものである。普通の授業と同じように考えられては困る。なぜ君は試験に欠席したのか。試験に関しては、忌引き以外は認められないのが僕の方針だ。あまり身近な人を殺すな」。最後の言葉は半ば冗談であったが…。二年目からは誰も来なくなりました。広く受講生を募る図書館司書講習では全出席が義務づけられています。普段の授業では介護等体験・障害児教育実習・スポーツ大会による欠席は認めています。しかし試験だけはいかなる理由があっても欠席した者には単位を出さず、追試の再試も行わないことにしています。160人もの学生に追試・再試のサービスをして、いかに採用試験に有利だからといって全員に資格を認めるわけにはいきません。「豊かな人間性」とは何か。授業では自明の前提として話を進め、試験に出題（その要件を五つ挙げ箇条書きにしろ）することにしてあります。ところが、毎年三分一の学生が答えられません。そこで思い返してヒントとして、現在の社会的事件を考えてみなさい、ひとつぐらいは挙げられるでしょう、「生命を尊重する心」と言っても相変わらず三分一の学生が白紙の状態です。そもそも人の話を聞いていないのです。それともそんなことには関心がないのでしょうか、さっぱり分かりません。

ここで思い出したことがあります。ある年に授業を終えて帰ろうとした時、教壇になにやらメモを置いて行った学生がいました。無署名でしたが、読んでみると、先生の板書する漢字の筆順が怪しいということと、もう少しやる気を起こさせる授業をして欲しいというものでした。筆順については調べて反省したが、「やる気」については「大学生ともあろうものが、なにを言うか。やる気は自分で起こせ」と翌年の授業で言い放ちました。それ以来、授業で小言をいうようになりました。ほかの授業では、二週間講義をする毎に、一回書かせる（原稿用紙二枚）ことを五回繰り返すと宣言して実行しました。最初の二回ぐらいは、「読めてない、書けてない」と言っては小言をいい続けました。「読解力養成は全教科で行う、というのが文部科学省の通達である。読むことと書くことは大学生のうちに訓練しないといけない」と追い討ちをかけ、圧力をかけたが、抜ける学生はいませんでした。そして、三回目からは褒めることに転じました。実際、全体的に目にみえて読めるようになり、書けるようになりました。岩見沢校に奉職してちょうど30年になりますが、昨年度の後期ほど学生に向かって小言をいったことはありませんでした。どうせ退職するのだから、言っておけという気持ちでしたが、我ながら真剣に小言をいっている自分に気づき苦笑した次第です。

昨年2月に交通事故に遭い、罷り間違えば命をなくすところでした。多くの教職員の方々にご心配をいたいただき、ありがとうございました。また保険会社の後遺症の治療費の支払い拒否に対して、岩見沢労働基準監督署の独自の判断により労災でまかなうことになり、深く感謝しております。